篠山市民の猿害に関する被害意識と許容

一人と猿の関係性の再構築を目指してー

布施未恵子（神戸大学大学院農学研究科）

Local People's Consciousness of Crop Damage Problems Caused by Monkeys in Sasayama city, Hyogo, Japan: A Reconstruction of the Relationship between Humans and Japanese Monkeys

Mieko Fuse (Kobe University)

With the increasing agricultural damage caused by monkeys, certain countermeasures have been adopted on the basis of existing knowledge. However, the local people's reaction to how these reactions affect the continuation of the measures is not clear. Through interviews of 19 local people, this study provides an example of victim consciousness in Sasayama city, Hyogo, where measures are taken to control the damage caused by monkeys. In this example, the factors influencing victim consciousness include the ownership of the crops, the amount

of crops eaten, and whether the damage is indirect or direct. Mere recognition that monkeys cause damage does not lead to damage-control measures; these measures are adopted when there is direct damage. However, it is possible that these measures continue to be applied because the farmers enjoy interacting with the monkeys. Therefore, providing such ideas as enjoying the interaction with monkeys is needed, and to find regional values as leading model town for monkey damage measures.

1. 研究背景と目的

ニホンザル（以下サル）が起こす被害は猿害と呼ばれ [1], 近年増加の一途を辿っている。その内実は、農作物被害にとどまらず、生活環境被害に関わる問題など、多岐にわたる [2]。地域住民の被害意識は、実質的な被害の増減と必ずしも直線的な相関関係にあるのではなく、多くの社会的要因によっても形成されることが示唆されている [4]。猿害被害を軽減するには、個体数の管理や防除技術の向上といった外部が主体となる対策だけではなく、被害を受ける住民が主体となって被害管理に取り組む必要性がある [2,3]。猿害が生じるような集落は、高齢化や過疎化といった問題も抱えているが、そういった不利な条件のもとでも、地域の合意形成を進め主体となる住民が集落ぐるみで対策に取り組むことで、相対的に猿害を軽減できることが明らかにされている [5]。一方で、現在の農村集落には、農家と非農家が混在しており、集落ぐるみの対策には非農

家の協力が不可欠との指摘もある [6]。農家同士であっても対策意欲に差があるならば [7], 非農家に獣害対策の必要性を実感してもらうのは容易ではないと推察される。こういった知見を元に、被害管理・生息地管理・個体数管理の3点から様々な対策が実践され始めているが、それらが地域住民にどのように受け止められているかは明らかになっていない。本稿では、地域住民のもつサルに対する多様な価値観を導き出す方法である聞き取り調査法 [8] を用いて、猿害対策が進められている地域住民の現在の被害意識や対策への意欲の実態を明らかにする。それらの言説から被害意識と対策行為とがどのようにリンクしているかを考察し、それらをもとに、住民が主体的に対策行為を継続するための支援のあり方を提案したい。

2. 方法

調査地である兵庫県篠山市にはニホンザル4群

(A, B, C, D) が生息しており, 群れ密度は兵庫県内でも最大である¹⁾. そのなかでも D 群は, 篠山市の東部に遊動域をもち, その遊動範囲は i, ii, iii, iv, v, vi, vii, viii の 8 集落にまたがっている. D 群は 33 頭で構成され, 4 群の中では人慣れの程度は 3 番目である¹⁾. D 群のエリアを含む多紀地区は, 篠山市のなかでも高齢率が高く, 8 集落は中山間地域に該当する. ここでは猿害対策用の最新電気柵が試用されているほか, サルの情報提供を目的とした講習会が開かれている (2008 年に 4 回実施²⁾).

聞き取り調査は 2010 年 9 月 27 日～10 月 2 日に i, ii, iii, iv の 4 集落で実施した. 19 名の聞き取り調査対象者に, 年齢, 農業従事期間, 出生から現在までの簡単な遍歴を聞き (表 1), 現在の対策状況を調べた. 聞き取り調査の内容は, 被害について/どんな作物がどのように持っていられるのか/サルについてどう思うかなどであった. また, 定性データを補完するため, 上記の 19 名のうちの 6 名 (被害経験あり) と, 篠山市在住の非農家 7 名 (被害経験なし) に, 簡単なアンケート (2 項目) を実施し (表 2), 被害に遭ったとき (遭ったとしたらどうか) の悔しさを 10 段階で数値化してもらった (これを悔しさ度と呼ぶ).

3. 結果と考察

(1) 被害の意識

聞き取り調査の結果を, 被害経験ありとなしで比較した (表 3). 項目 1 では, 数値が高いほど, サルが食べる作物の所有者が明確であることを表しているが, 経験ありかなしかで分布に違いはなかった. この結果から, 被害経験のありなしに関わらず, 人が植えた作物については, 害という意識が生じるようである. 項目 2 では, 質問内容の数値が低いほど, ほんの少しの食害でも被害を意識することを表しているが, 被害経験なしのほうがありよりも数値の低い方に回答が偏っており, 経験ありの人々は食べられた作物の割合が半分を超えると, 被害を意識するが, 経験なしの人々は食べられた作物が半分以下でも, 被害を意識するようである. 悔しさ度を経験ありとなしで比較すると, 経験なしの方がありよりも平均値が高い傾向がみられた (経験あり: 5.16, 経験なし: 8.43). 被害経験がある人々は, 直接的に農作物を食われているにも関わらず, それを有害

表 1. 聞き取り調査対象の概要

(聞き取り調査の結果から算出)

番号	地域	性別	年齢	農業従事期間	農業従事タイプ	畑面積 (m ²)
1	i	女	80 代		a	36 家の庭
2	i	女	60 代	15	c	138
3	i	男	80 代		a	301
4	i	男	70 代	20	a	275
5	i	女	60 代	7	b	81 家の庭
6	i	女	70 代		不明	64
7	i	女	60 代	42	a	196 52
8	i	男	60 代	3	b	5883
9	ii	男	60 代		a	
10	ii	女	80 代	50 年以上	a	178
11	ii	男	60 代	1	b	3472
12	iii	男	60 代	10	b	6942
13	iii	女	50 代		b	177
14	iii	女	50 代		b	2918
15	iii	女	50 代		不明	不明
16	iii	男	90 代		b	不明
17	iii	男	60 代		b	4061
18	iii	男	60 代		b	2918
19	iv	男	70 代		a	不明

表 2. 獣害意識についてのアンケート

項目	アンケート内容
	(1)～(4) のどれが「獣害」だと感じますか?
1	(1) 山の中に生えている栗を食べる / (2) 山すその栗を食べる / (3) 集落で山すそに植えた栗を食べる / (4) 私の畑に植えた栗を食べる
2	(1) 畑に入る / (2) 畑の作物を数個食べる / (3) 畑の作物を半分食べる / (4) 畑の作物を全部食べる

表 3. 被害意識についてのアンケートの回答分布

(経験なしは計 7 名, 経験ありは計 6 名).

	内容	1	2	3	4	その他
項目 1	経験なし			4	3	
	経験あり		2	3	1	
項目 2	経験なし	2	2	3		
	経験あり			4	1	1

と感じたり悔しく思う度合いが、むしろ低い傾向がみられた。

(2) 被害の実態と農業従事タイプ

聞き取り対象者の人生の履歴をもとに、農業従事を3つのタイプに分類した(表1)。a. 専業農家で、出生から現在まで同じ場所に住み、農業を家業としているタイプ(n=7)。兼業農家から専業農家に移った場合は、b. 出生あるいは嫁いってから現在まで同じ場所に住んでいるものの、退職してから本格的に農業を始めたタイプ(n=9)、c. 別の土地から移り住んでから農業を始めたタイプに分ける(n=1)。それぞれの農業従事期間は、aでは女性の場合は嫁入りしてから現在まで、男性については仕事を引き継いでから現在までをさす。今回、聞き取り対象者でaにあてはまる年齢は60代以上であるため、女性のaタイプの農業従事期間ははみな40年以上となる。男性については、両親から引き継いだ時期があいまいであるため、はっきりとした値は得られなかった。bの農業従事期間は、1年から10年までとばらつきがあった。最近の被害状況について、まず、各畑の物理的な対策状況と関係から述べる。畑の獣害対策の種類は、畑を電気柵かのり網のどちらで囲うかの二つに大きくわかれている。電気柵で囲まれた畑は被害が最近までなく、効果の高さが伺える。電気柵を張っていても被害があった畑(10番の畑)は、電池切れであった。のり網で囲っている畑(n=11)については、1週間以内に被害が起こった畑がほとんどで、その相手はサル(n=5)、シカ(n=5)、イノシシ(n=1)であった。1例のみ、のり網対策だが被害が最近までなかった。

農業従事タイプと被害対策との関係から、aの人々が電気柵を使っている割合はbの人々よりも高いことがわかる。これは、aの人々の畑は特に猿害がひどく、行政関係者が試験的に電気柵を設置している場合が影響しているためである。よって電気柵の割合の違いで対策への意欲の有無を考察することはできない。以後、農業従事タイプと被害意識と対策行為との関係を、言説データを交えて分析する。

(3) 被害意識に関する言説

1) 悔しさ度

悔しさ度は「0」と答えた8番(男性)は「被害と思っていない」と述べており、悔しさ度が「10」と答えた5番(女性)は、「値段の高い苗を買って

いるのに全部食べられてしまうから」と述べた。このように、悔しさの高低は被害意識の発生に関わると考えられる。一方で、一度は悔しさ度を表現しながらも、「7のときもあるし10のときもある」であったり、「柵の不十分さを思うと5だが、とられたらやっぱり悔しいので10」というような言説もあった。このことから、悔しいという気持ちは固定したものではなく、状況によって変化するものと考えられる。また、1番(女性)は「昔はちょっととられた時に腹がたってたけど、年取ったのとあきらめて、今は悔しさ度は2〜3やね」といていた。このことから、悔しさ度は年単位でも変化する可能性がある。こうした、変化する「悔しさ」は、被害意識の変化に影響を及ぼしているものと考えられる。

2) 金銭的/精神的な価値との関係

項目2のところで、12番(男性)は、「獣害だと感じるのは畑で3割以上の被害が出たときだ」と答えた。3割が基準となる理由は、共済金がおりるかどうかにある。また、「今まで一生懸命育ててきて、今から出荷ってときに食べられる(14番)」といった、被害意識と収穫時期との関係を示唆する言説も

表4. 農業従事タイプと被害実態

(2種類の対策をとっている場合は、畑面積の広い方のデータを採用した)。※1回でも言説が得られれば○とした。

番号	農業従事タイプ	対策	最近の被害	被害動物	悔しさ度	言説 ^{a)}			
						否定的	継続性	行動描写	共感
1	a	電気柵	なし		3		○	○	○
4	a	のり網	なし			○		○	
3	a	のり網	1週間以内	シシ				○	
7	a	電気柵	なし	サル	7			○	
9	a	のり網	1週間以内	シカ				○	
10	a	電気柵	1週間以内	シカ		○		○	
19	a	のり網	1週間以内	シカ	6			○	○
5	b	電気柵	なし		10				○
8	b	電気柵	なし		0		○	○	○
11	b	のり網	1ヶ月以内	シシ				○	
12	b	のり網	1週間以内	シカ	5			○	
13	b	のり網	1週間以内	サル		○	○	○	
14	b	のり網	1週間以内	シカ		○	○	○	
16	b	不明	不明						○
17	b	のり網	1週間以内	サル				○	
18	b	のり網	1週間以内	サル					
2	c	のり網	1週間以内	サル				○	○
6	不明	電気柵	1週間以内	サル				○	
15	不明	不明	不明			○		○	

ある。逆に、作物に投資した額や時期的なことには触れず「せっかくなつくたものがとられる (4 番・13 番)」や「子供たちにやりたいのになくなる (10 番)」と答えた人がいた。14 番の女性は、「畑もつくり甲斐がない」といっている。このように、金銭的な価値観ではなく、作物ができることで得られる達成感や誰かに作物をあげる喜びといった、精神的な価値観を奪われることに対して否定的な意見を述べていることがわかる (表 4)。

3) 被害意識から対策行為に至る過程

「自分とこの畑にくるまでは『気の毒やねえ』としか思わなかったけど、自分のとこにきたら『(対策を) やらなあかん』と思う」(18 番・男性) という言説があった。これは、サルが畑にきたという経験が、被害対策をする契機となったことを表している。一方、「このあいだ集落で集まって、農林組合長が『みんなで追い返そう』いうて『がんばろう、おー!』」といってたけど口だけや。まだ一度もみんなで動いたことない」とも述べており、集落ぐるみの対策という行為までには至っていないことを明らかにしている。被害意識と具体的な対策行為との関係を見ると、否定的な意見を述べている人はのり網で囲うという簡単な対策にとどまっている。サルに対して防除効果の高い電気柵を設置しない理由は様々あるだろうが、「孫がきたときに危ないから」という言説もあり、電気柵のデメリットが、のり網だけの対策で被害をうけることを上回るため、例え効果が高くても使われていないことがわかる。

4) 対策行為の継続性

農業従事タイプの b に該当する 9 名のうち 3 名は「知恵くらべ: 8 番・男性」、「いろいろ考える、それが楽しい: 11 番・男性」、「いちごっこ: 13 番・女性」というように、サルとのやりとりで積極的ともとれる発言をしていた (表 4)。14 番 (男性) は、「行政から支給されているエアガンでは効果がないためパチンコを購入し、さらに効果のあるものを探している」と述べ、サルとのやりとりを繰り返している。「被害とっていない」と述べた男性 (8 番) は「サルが電気柵に触る瞬間に電気を流してやった」とか「鉄砲渡されたけど意味ない、目をねらう、体をねらう、身体でなく」というような発言をしている。「掃除機に鈴つけて鳴らすとサルが逃げる (1 番・女性)」という発言からも、サルに効果のある対策

を自身で発見しているようにもとれる。一方で「百姓は食べ残し: 5 番・男性」というような、サルとのやりとりで農家側が受身になっている発言もみられた。

(4) サルそのものに関する言説

1) サルの行動描写

聞き取り時に、もっとも多くの説明がなされたのがこの内容である。サルの行動の描写は「畑への接近」「作物の運搬・食行動」「移動」「追い払時」「その他」に分かれた。作物の運搬については、かぼちゃやスイカを「大事に/両脇にかかえてる」という表現がなされていた。作物の食行動は「きれいに食べる」「おもしろいように食べる」「カスだけ残す」というように、他の動物やあるいは人間の食行動から類推される表現である。「列に並んで歩く」や「ハナレザルはおとなしい」といった言説もみうけられた。これは、サルの社会性を表す表現である。どの言説も、サルの様子が目に浮かぶものであり、対象者の観察力や関心の高さを表しているようにもとれる。

2) サルがおかれている状況の描写

サルへの共感と思われる表現が、7 名の発言にみられた。「サルも生きなんさかい」や「サルも不景気やから」という、サルが現在おかれている状況を自身の生活と重ねたと思われる表現が 5 名の発言にみられた。そのうちの 19 番 (男性) は「サルは人間に似たもん」で「人間より一枚うえ」と述べている。また、8 番 (男性) 「人間は (サルより) あとから来たんやから」と述べている。80 代の女性 (10 番) は、「動物と同居してんねん」と言っていたり、90 代の男性 (16 番) も「サルはサルなりに出とるんやからしゃーない」と言っていた。

4. まとめ

(1) 被害意識の境界

本稿では、サルに対する被害意識が、サルの被害経験の有無で異なることを示唆し、その内実について分析した。被害意識は、猿害の経験に関わらず、人間が植えた作物が野生の植物であるかどうかで異なる。被害経験があるかどうかで異なるのは、どの程度食べられるかによる。また、自分の植えた作物あるいは所有物がとられたという直接的な経験か、人が被害を受けているのを見たという間接的な経験かでも異なる。猿害を直接的に経験すると、金銭的

に大きな損害を被るか否か、精神的な喜びを奪われるか否か、という要素によって被害意識が境界づけられる。また、サルへの共感が、上述した二分法では分類できず“境界づけられない”被害意識という現象を生みだしている。これは、猿害をめぐる人々の言説には様々なサルの存在があること [8] と同様な結果である。また、「柵の不十分さ」という言説には、ii 地域で行われている集落ぐるみの被害管理の取り組みが影響している。被害認識の先鋭化は社会的要因によっても形成される [7] が、自身の管理が不十分である以上被害を受けても仕方ないというような、集落ぐるみの取り組みで得られた知識が被害意識の低下に影響している可能性を示唆している。

(2) 被害意識から行為へ〜どう防ぐかではなくどう生かすか〜

被害を意識したから対策をとる、という論理で人々が行動しているならば、被害意識の境界がその都度変化する場合には、対策行為をとるかとならないかも決まらない。農家ですら対策をとるかとならないかが決まっていないのだから、非農家はなおさら対策へと向かいにくいことが推察される。被害を未然に防ぐための誘引物質の排除、追い払い、有害個体の駆除といった対策はすでに実践されている [2] が、繰り返されることで、サルは馴化するため、農家はさらに対策を強化せねばならない。そういった背景からくる諦め [7,8] は、たとえ若い農家であっても今後起こりうる。サルに追われる形で対策するのではなく、サルより先をいく形で対策できないものだろうか。徳島県鳴門市では、有害駆除活動を行う傍ら、地元につながる猿話を活用して非農家が主体的に獣害対策に関わりたくなるような場づくりをしている [10]。今後は、獣害をどう防ぐかではなくどう生かすか、という視点で地域振興的な取り組みを展開する試みが不可欠である。

(3) 被害意識から行為へ〜サルとのやりとりそのものの志向〜

本稿では、畑にくる動物とのやりとりを、楽しみとまではいかないまでも「知恵くらべ」として積極的に受け入れている人々もいることが明らかになった。それらに該当する農業従事タイプ b の人々は、農業を始めて間もなく、動物とやりとりをする頻度が低いから、楽しいのかもしれない。また、退職後に農業を始めたため、年齢的にも精神的にも成熟し

金銭的にも余裕があるために、積極的に対応できるのかもしれない。「サルも生きなんさかい」というようなサルへの共感を表す言説と合わせると、サルを自然というよりも人間に近い存在として考えているために、主体的なやりとりが生じている可能性がある。1 番の女性は、農業従事タイプ b ではないが、「サルから学ぶものが多い」として動物との対峙を「損得ではない」と述べている。聞き取り対象者が描写したサルの行動の多くが、擬人化されていることから「サルに人間の姿を投影」している。これらから、農家は、農業従事タイプに関わらず、サルとのやりとり自体に価値を見出す可能性があることがわかる。

調査者が 8 番の女性にサルの生態について話をしていると、「おもしろい」とつぶやいたことがあった。被害に関係するようなサルの生態だけでなく、それらの背景となるサルの社会や生き様などの様々な知見を提供することも、サルとのやりとり自体に価値を生み出す契機にもなる。被害意識の高低に関わらず、サルとのやりとりそのものに意識が向かうようになると、被害と意識なくともサルがきたら相手をする、サルがこなくてもサルがくることを想定して何かをする、という行為になるのではないだろうか。

被害とその防除という単なる作業ではなく、サルとのやりとり自体に価値を見出すような視点を提供することもまた、農家が無意識のうちに対策行為へと向かう一つのやり方である。

(4) 地域住民が主体的に対策行為を実践するには

これまでの被害対策・生息地管理・個体数管理という外部からの対策支援に合わせて、農家と非農家に関わらず地域住民が一丸となって取り組む必要があることは以前から指摘されていることである。地域住民が一丸となるには、ただ獣害防除に追われる被害対策という視点だけでなく地域振興としての視点も必要である。そのためには、サルの生態を利用した知恵比べ的な視点や、野生動物との共存のあり方自体を地域固有の価値としてアピールするような、分野横断的な取り組みが求められている。

注 1) ニホンザル保護管理計画, H21 年 3 月 (兵庫県) より引用。

2) 鈴木克哉 (兵庫県森林動物研究センター) 私信。

引用文献

- [1] 井上雅央『山の畑をサルから守る—おもしろ生態とかしこい防ぎ方』農山漁村文化協会, 2002.
- [2] 室山泰之『里のサルとつきあうには—野生動物の被害管理』京都大学学術出版会, 2003.
- [3] 吉田 洋, 林 進, 北原 正彦, 藤園 藍「富士山麓地域におけるニホンザル野生群による農作物被害と被害防除の実態」『農村計画学会誌』25, 2, 2006.
- [4] 鈴木克哉「野生動物との軋轢はどのように解消できるか?—地域住民の被害と獣害の問題化プロセス」『環境社会学研究』14, 2007, pp. 55–69.
- [5] 山端直人「集落ぐるみのサル追い払いによる農作物被害軽減効果—三重県内 6 地区での検証」『農村計画学会誌』28, 2010, pp. 273–277.
- [6] 木下大輔, 九鬼康彰, 星野 敏, 武山絵美「水稻地域における集団的な獣害対策の現状と非農家の協力の可能性」『農村計画学会誌』27, 2008, pp. 227–232.
- [7] 木下大輔, 九鬼康彰, 武山絵美, 星野 敏「和歌山県における獣害対策の実態と農家および非農家の意識」『農村計画学会誌』26 (Special issue), 2007, pp. 323–328.
- [8] 丸山康司「「害獣」の存在と不在—ニホンザル問題における多角的な言説空間—」『年報筑波社会学』14, 2002, pp. 17–39.
- [9] 岩崎亘典, 栗田英治, 嶺田拓也「農村と都市・山地との境界領域で生じる軋轢と自然再生」『農村計画学会誌』27, 1, 2008, pp. 32–37.
- [10] 山 泰幸「民話の環境民俗学—猿退治伝説と猿害問題のあいだ—」『環境民俗学』昭和堂, 2008, pp. 211–229.